

# アミーゴ会だより

2022年7月  
通巻第51号  
季刊 2022-III  
[www.mex-jpn-amigo.org](http://www.mex-jpn-amigo.org)



発行人：河嶋正之  
編集人：河嶋正之  
事務局：笠井道彦

## メキシコ釣紀行 その1

### メキシコでオーパ！する

メキシコ・日本アミーゴ会海外会員  
在ワルシャワ現役商社員 柿沼純平

柿沼純平さんにメキシコでの釣行記を連載で縦横無尽に綴っていただきます。我らの「釣りキチ純平」さんは、かの開高健の名作『オーパ！』を凌ぐ“傑作”を目指す意気込みです。乞ご期待。柿沼さんは1967年東京生まれ。海川湖を問わずルアー&フライフィッシングが趣味で、一級小型船舶免許を持つ気象予報士。本業は商社マンで2012年から2018年までメキシコ駐在。ブラジル、ポーランド（現在勤務中）にも駐在経験。吉野幹事のお骨折りによる満を持しての登場。＜編集部＞

#### 自己紹介：釣りは持病

メキシコは、西は太平洋、東はカリブ海に面した、広い国である。自然が豊かで歴史も深く、観光地には事欠かない。メキシコに住んだ外国人は（あるいはメキシコで生まれ育った人にとっても？）、皆行ってみたい場所が多すぎて困るだろう。しかし小学生の頃から釣りが好きで、開高健氏の『オーパ！』を愛読していた私の場合、2012年から2018年まで6年間メキシコシティに仕事で駐在した間、休暇のほとんどは「釣り旅行」で終わってしまった。日本国内や他に住んだ国でも同じだったので、ほとんど持病である。

発病はよく満月の夜におきる。大潮で海中のプランクトンが動くため、それを食べる小魚、その小魚を食べるフィッシュイーター（小魚を食べる大型の魚）の活性も上がるからだ。月明りは目で小魚を追う夜行性のフィッシュイーターにとって都合が良いのである。2012年4月7日、日本からメキシコに赴任する前日の夜も、満月の大潮だった。その頃私の専らの釣りスタイルはルアーフィッシング（疑似餌を使った釣り）で、会社の同期でルアーフィッシング仲間だったIT君が「送別釣り」をやってくれると言うので、東京湾にシーバス（スズキ）の夜釣りにボートで出た。50cmクラスのシーバスが20匹も釣れたが、Catch&Release（釣った魚をなるべく傷つけずに水に戻すこと）がモットーの私は、夜中の1時に手ぶら&満面の笑顔で家に帰った。妻は呆れていた。

#### メキシコ釣りはじめ

メキシコでは様々なビジネスが期待でき、仕事への気合は十分に赴任したが、その前にまずやるべき大事なことが2つあった。床屋に行く暇がなぐだいぶ伸びた髪を切ることに、釣具屋を探すことだ。メキシコシティの釣具屋は多くはなかったが、ネット検索で簡単に見つかった。行ってみると日本と比べ、やはり品揃えが少ない。ブラジルでも感じたが、日本の釣具は何と充実していることか。フルセット船便で送って良かったと思った。愛想の良い釣具屋の主人に、「この近くでルアーやれるところある？」と、ポルトニョール（俗にポルトガル語訛りのスペイン語）で聞くと、一番近いところでも車で3時間のシマパン（イダルゴ州）という湖だと言う。メキシコシティは海から遠く、川もほとんど無い。雨は結構降るが地下水となってしまうらしい。「遠いなあ」と言うと、「ロビーナ（ブラックバスの現地名）たくさん釣れるよ」と店主。ブラックバスは日本では外来の害魚とされているが、メキシコでは地元の大事な食材だ。ブラックバス釣りは子供の頃から馴染みがあったので、まずこの湖から始めることにした。

メキシコシティで釣り仲間を見つけるのは簡単だった。その後6年間愛車となったJEEPを購入した自動車ディーラーのメキシコ人店員や、日本人駐在員仲間など、すぐに何人かと出会えた。特にシマパンに近いケタロ市の日系自動車部品メーカー現地法人社長のMTさんとは、数えきれないほどシマパンで一緒にブラックバス釣りをした。ボートで岸沿いにスピナーベイトやサスペンドミノ、ワームをキャストすれば、一日で何十匹も釣

#### = 目次(案) =

- |  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. メキシコ釣紀行「メキシコでオーパ！する 1」  | アミーゴ会海外会員 柿沼純平 ...1   |
| 2. メキシコへの誘い「ぶらりメキシコ人旅 3-ゴルダ山脈の秘宝(1)」   | 写真家・アミーゴ会会員 阿部修二 ...4 |
| 3. 私のメキシコ「メキシコの著名人 2-著名画家&著名作曲家」   | アミーゴ会会員 桜井悌司 ...7     |
| 4. お知らせ:21st.Fiesta Mexicana9/23~25/メキシコ報告:Covid19第5波警戒...3/6州知事選結果/あとがき...9 |                       |

れた。シマパンによく一緒に行った建機商社の友人 OT さんは、PE ライン（ポリエチレン素材を編み込んだ、軽く細くて強い釣り糸）と軽いワーム（ゴム製の疑似餌）を使い、糸ふけを目で見てアタリを取る名人技で、いつも 100 匹近く釣っていた。いつもお世話になった釣りガイドのアルフレッドは、時々アメリカに出稼ぎに行ってしまうが、その時期は同じ名前の息子が相手をしてくれる。アルフレッド・ジュニアは最初は頼りなかったが、何年かすると、自分も釣りが大好きなのに客のサポートに徹する、立派なガイドになっていた。

### 在墨日本釣り会議の“令宿”

会社の後輩とはメキシコシティから飛行機に乗り、世界中のバス・アングラの間で有名な湖レイク・エルサルトル（シナロア州）にも遠征した。この湖は水中に林立している立ち枯れの木の周りに、多くの大型バスをストックしているため、バスを掛けた後それら障害物の間に潜り込まれぬよう、強いロッドに太いラインで、ドラッグ（大きな魚が掛かった時に、リールに負荷をかけつつ逆回転して釣り糸を送り出す機能）をきつめに設定したパワーゲームが基本だが、それに慣れるまで何度も掛けた大物を逃してしまった。

釣り人専用のロッジはいつもアメリカ人客であふれており、夕食時は彼らと写真を見せ合った。皆 Catch & Release なので、魚は写真の撮り方次第で大きくも小さくも見せられる。私はこの点で高い技術を持っており、腕を伸ばして魚をカメラに思い切り近づけ、手が大きく映らないよう魚の陰に隠す。こうすると 40 cm の魚は 60 cm くらいに見えるのだ。アメリカ人に Oh, big one! と褒められると、「そうでもないよ」とだけ答えて、マルガリータで乾杯したものだが、おそらく手口はばれていたと思う。



写真左：レイク・エルサルトルのブラックバス。

日本のブラックバスとは別の魚に見えるほど、中年太り型の体格。

その後、メキシコシティの駐在員仲間 TT さんの発起で「在墨日本釣り会議」なる日本人サークルを結成し、飛行機や車で太平洋岸、大西洋岸の各釣り場に遠征した。時には家族も含め 10 人くらいで貸別荘を借り、昼間釣った魚を料理して皆で食べ、テキーラを飲んで夜を明かしたものである。商社の IY さんやボイラーメーカーの OM さんは料理が得意で、マイ包丁持参でヒラアジの刺身やハタの煮つけを作ってくれた。私はいつもテキーラを飲みながら待っているだけ。真夏にマンサニージョ（コリマ州、太平洋岸）にシイラ（現地名ドラード）を釣りに行った日は、そのバチが当たったのか、私は船に水を持っていくのを忘れ、熱中症寸前で貸別荘に帰ってくると、不足した水分を全てテキーラで補ってしまったため、その夜はえらい目にあった。そんな珍道中旅行を、いつからか私達は「釣り合宿」と呼んでいた。

釣り合宿はシンプルな貸別荘を利用することが多かったが、バハカリフォルニア半島の先端にあるロスカボスに、弁護士の NT さんに行った時はゴージャスだった。私的にはかなり背伸びをして NT 氏御用達の高級ホテルに宿泊し、クルーザーをチャーターして、ルースターフィッシュ（現地名ペス・ガージョ）という、日本にはいない魚を狙った。この日は大潮で、約 100 頭のイルカの群れやマンタが船の周りを飛び、NT さんも私も 60~70 cm クラスのルースターフィッシュをたくさん釣りあげ上機嫌。チップをはずんでももらえるだろうと、ガイドのアレックスもノリノリだった。



写真上：ロスカボスのルースターフィッシュ。

背びれがユニークでニワトリのとさかに似ていることからこの英語名・スペイン語名がついた。悪そうな二人の“右”側がガイドのアレックス。

### 手作りのフライ&ルアーで挑戦

私は新しい釣りにも挑戦した。前述のルースターフィッシュや、ボーンフィッシュ（現地名マカビ）などのフライ（毛バリ）フィッシングだ。ルアーフィッシングとフライフィッシングでは、実は釣り方がかなり違う。ルアーは普通魚がいそうな場所の少し向こう側に投げ、その英語の意味（魅惑）の通りなるべく近くを泳がせて魅せる釣りが基本だが、フライフィッシングは軽いフライをラインの重さで遠くに投げるため、鞭のように太いラインを使うので、魚の向こう側までフライを飛ばすと、手前に落ちるラインで魚を警戒させてしまう。魚の鼻先にピンポイントにフライを落とすのがベストである。在墨日本釣り会議には、フライフィッシングの師匠が複数いたため、道具やキャスト（投げ方）、フッキング（魚の合わせ方）、魚の走らせ方（泳ぐ力の速いボーンフィッシュは、一度走らせてから取り込む）など教わった。特に師匠の一人 MZ さんは、チャプルテペック公園（メキシコシティ）で手取り足取りキャストを教えてくれ、自分でどこが悪いかわかるように動画も撮影してくれた。結局ボーンフィッシュは、何も教わっていない妻に先にさっさと釣り上げられたりしたが。

フライフィッシングのタックル（釣竿・リールなど道具一式）は結構高かったが、日本出張時に一式調達した。師匠達には毛ばりの巻き方も教わった。タイイングセット（毛バリを巻く道具一式）をニューヨークのフライショップ Urban Angler で購入し、自分で毛ばりを巻いてみた。新しいことを始めるのはいつも楽しい。MZ 師匠は自宅に招いてくれ、ボーンフィッシュ用の定番フライ「クレイジー・チャーリー」の巻き方を丁寧に教えてくれ

た。奥様も素晴らしい方で、いつもチマチマと毛ばりを巻くおやじ二人を優しく見守り、コーヒーとケーキを出してくれた。しかし、MZさんはなんと日本帰国後すぐに病気で亡くなってしまった。師匠に教わりながら巻いたフライは、私の一生の宝物である。



写真左：シアン・カーンのポーンフィッシュ。砂の中のカニを主食としており、下向きのおちょぼ口がかわいい。

写真右：自作のフライ。なぜこれがカニに見えるのか不思議だが、左下の2つがMZさんと一緒に初めて巻いた、クレイジー・チャーリーと呼ばれるポーンフィッシュ釣り定番タイプのフライ。

私はチマチマした作業が性に合っているのか、毛ばり作りはすぐに上達し、次はルアーを作ってみたくなった。駐在赴任時の引越し荷物を包んだウレタン樹脂と、手芸用のマイラーチューブ（私はいまだに手芸であれをどう使うのか知らない）で、小魚を模したルアーを作った。ちょうど良い柔らかさと鱗の感触で、手前味噌ではあるがプラスチック製の市販の固いルアーより、本物の魚に似ていると思った。釣り場で実際に投げて泳がせてみると、動きは今一つ小魚とは違ったが、それでもすれていないメキシコの魚達は、結構食らいついてくれた。中でもテコルトラ（ベラクルス州）で掛けた1mオーバーのターポン（現地名サバロ）は、私の作ったルアーをがっつきり啜えてくれ、20分もファイトしてくれた。残念ながら最後はフックアウト（針がはずれ逃げられること）で、IYさんが上手に撮影してくれたYouTube動画は、私の呆然とした姿で終わっている。

ターポンという魚は、実は私が最も面白いと思う釣魚である。まず居そうな場所を探すのが楽しく、トップ（水面付近の釣り人から見えるところ）で派手に水しぶきを上げてヒットしてくれる。口が堅いのでフッキングが難しく、掛けたらジャンプを繰り返すのでフックアウトもしやすいが、これが何とも狩猟本能をかき立てられる。圧巻は妻と旅行で行ったリオ・ラガルトス（ユカタン半島北部）だった。小さなボートで餌場となる浅瀬で待ち伏せしていると、1mクラスのターポンが30匹ほどの群れで、イルカのように背びれを見せながら何度も襲来する。またマングローブ林の奥にボートで静かに忍び入りフリッピング（振り子のように、ルアーを木の枝がかぶる水面下に入れること）すると、モンスターがギラッと体を反転させながら食いつく。ガイドのエルメールは、私の日本仕込みのブラックバスの釣り方にいたく感動してくれた。



写真左：リオ・ラガルトスのターポン。フリッピングで獲った価値ある一匹。古代魚のような(鯉のぼりのような?)雄姿。

写真右：自作ルアー。微妙・・・。

(連載その1完)

\*\*\*\*\*

お知らせ **第21回フィエスタメヒカーナ in お台場**



3年ぶりのフィエスタメヒカーナ in お台場の開催が決定しました!!

9月23・24・25日の3日間、

お台場がメキシコに大変身!! 皆さん、メキシコとの再会です!!  
ご家族ご友人とお誘い合わせのうえ連日お出かけください!!

[開催概要]

日時：2022年9月23日(祝)・24日(土)・25日(日) 11:00~19:00

会場：お台場デッキ(ウエストプロムナード公園内)@港区台場

詳細：<https://www.fiestamexicana-tokyo.com/home>

☆催事内容や準備状況などは上記公式ウェブで随時ご確認ください。

メキシコ報告

COVID19 第5波を警戒



(図出所:El Economista 紙7月17日付)

日本では第7波の感染拡大が懸念され、メキシコでは第5波の到来が危惧されています。墨保健省は7月17日の新規感染者8,861人、死者13人、病床占有率一般用18%、重症用6%、原因株はBA4とBA5と発表。過去5日間の一日当たり平均感染者数は3万人超で、保健省は警戒を強め、ワクチン接種態勢を強化しています。

## ぶらりメキシコ人旅 —ゴルダ山脈の秘宝(1)：ハルパン、コンカ—

メキシコ・日本アミーゴ会 会員  
写真家・ルポライター 阿部修二

### はじめに

前はケレタロ市の成り立ちについて訪ね歩いたことを書かせていただいたが、今回は同じケレタロ州東部、ゴルダ山脈に隠れるようにあるユネスコの世界歴史遺産の5つの小さな町や村を紹介させていただこうと思う。首都から夜行バスの直行便があるほか、ケレタロ市からバスに揺られて5時間ほどの距離にある。ゴルダとは「太った」を意味するが、まさに山深い所にある集落群だ。一度に紹介できる分量ではないので、今回は2カ所だけ。残りは次回とさせていただきます。

もしメキシコに滞在し十分に時間があれば、都会の喧噪を逃れてここでのんびり過ごされることをお勧めしたい。私が最初にここを訪ねたとき、祭りの装飾を作るワークショップに参加していたヨーロッパからの女性達は、私の短期滞在を非難こそしないが哀れんでいる様子で、せっかちな日本人を恥じ入ることになった。それ以降、何度か訪ねているが、メキシコ取材中に少し時間に余裕があれば、旅の疲れを癒すためにここを訪ねることを楽しみにするようになった。どこか私の故郷に似た牧歌的な風景、そして人情の柔らかさ。まさに懐の深さが「ゴルダ」なのだ。



ゴルダ山脈

### サンティアゴ・デ・ハルパン

さて、本題に入ろう。サンティアゴ・デ・ハルパンはこの5つの集落の中心で、ほかの4つの村に比べても人口の一番多い町である。ハルパンは亜熱帯気候や起伏の多い地形を利用して巨大なダム湖を建設し、生活用水、農業、漁業、観光に利用している。近代的なホテルがあり、世界歴史遺産を訪れる観光客受け入れの中心地となっている。今回のタイトルに「ゴルダ山脈の秘宝」を冠したのは、この町に残されている世界歴史遺産、18世紀建造の修道院・教会の特異な意匠、まさに「田舎風バロック」の素晴らしい作品が残されているからである。言葉で説明するよりは写真で見ていただく方が、納得していただけるものと思う。



ダム湖

北東になだらかに下る丘の中腹に町の中心があり、そこに巨大なモニュメントである教会と修道院、その前に緑豊かなソカロ



坂の町並み



ソカロ

ロ（中央広場）がある。ソカロ

に面して町の主要な建物、庁舎や図書館、文化施設、ホテル、商店、レストランなどが取り巻いているのはメキシコの町の典型である。だがその広場の北側に今日、郷土資料館となっている16世紀スペイン人建設の監獄・要塞がある。

ケレタロ市からは険しい山壁のゴルダ山脈を越えなければたどり着かない遠いところだが、メキシコ湾パヌコ地方から見れば、パヌコ川の上流のモクテスマ川、その支流のハルパン川が横切るハルパンは古くからウアステカ族に知られた土地だったようだ。そのためにスペイン人は彼らから情報を得て早い時期にここに姿を見せることになった。ハルパン南東5キロのタンカマ村には前世紀から西暦750年頃まで栄えていたウアステカ族の遺跡がある。ペロタの競技場(写真左下)や珍しい円形のピラミッドを残すタンカマ遺跡(写真右下)をそこに残している。



監獄・要塞



修道院・教会とソカロのあるロケーションは山城のような形になっていて、ハルパン川をかなり下に見下ろすような地形だ。この地域のほかのティラコ、タンカマ、タンコヨルは盆地にできた集落であるのに対して、想像するにこのハルパンの立地は敵対する者たちから集落を守るためにこうした地形を利用したのだと思う。前述したが、後にスペイン人たちがここに分厚い壁の監獄を用意したのは、ハルパンの先住民（遊牧のチチメカ族一派、パメ族）がスペイン人探検隊に激しい抵抗を示した結果だと思う。スペイン人は反抗する先住民を押し込めておく必要があったのだ。

長い間、この地はスペイン人に関心が持たれないままになっていたが、ケレタロの軍司令官ホセ・デ・エスカンドンがゴルダ山脈の平定を成し遂げた 1743 年以降に、フランシスコ会の修道士フニペロ・セッラと



5 人の修道士がこの地に布教のために送り込まれたことで、ハルパンが大きく変わることになった。

セッラ神父が中央から改宗メヒコ族の職人を伴ってこの地に着いたのは 1750 年で、彼が取り組んだのは先住民のヨーロッパ化、農業はもちろん、それ以外の職業訓練だった。

その翌年から 1758 年にかけて巨大な教会を建設することになるが、教会建設は大工、石工、煉瓦工、冶金工、塗装工、絵師、漆喰職人、家具職人を先述のメヒコ族を手本にして育成する場となった。

巨大な建物を 7 年ほどの短期間で立ち上げたことにまずは驚くが、ゴルダ山脈に残された「田舎風バロック」は、ハルパンの先住民の職業訓練の実習課題であり練習作品であった。極端に時間のかかる石彫を排し、壁面の装飾柱、蔦植物のレリーフ、聖人像を漆喰で表現しているために、輪郭が曖昧だ。そのゆえにどこか幼児の粘土遊び（失礼！）のような作品なのだが、ここに残る先住民の必死の手仕事となっている。



教会の正面装飾の意匠は、



←ハルパンの教会正面 ↑漆喰レリーフ(拡大)

修道士によるものだった。彼らは神学、哲学を学び、語学や芸術、建築に造詣の深い者たちで、教会の中に入ることに躊躇していた先住民を教会に引きつけるための装置を考え出した。ヨーロッパの田舎のカトリック教会を見たことがあるが、教会正面にこれだけの魅力ある装飾を施したのを見るのはまれである。

だが、ここメキシコにはメキシコの事情があった。布教を担当する修道士たちは、教会前のアトリオと呼ばれる庭に先住民を集め、教会正面装飾を使ってキリスト教のなんたるかを絵解きして布教に努めていたのである。

それには理由があった。1524 年という年は、フランシスコ会の修道士 12 名（ロス・ドーセ、キリストの 12 使徒にあやかって編成された）がメキシコで布教活動を許されて入植した年だが、その後約 50 年間に、アウグスティヌス会、ドミニコ会合わせて 88 の修道院・教会がメキシコ植民地の各地に建設された。初期の教会の建物は「要塞型」といって先住民の反抗を予見して城壁のような教会の壁のほか、修道院の門には武器を手にした兵士が常駐していた。布教活動をする修道士たちは教会内に先住民を導いて、聖なるキリスト教の厳かなミサを彼らに披露しようとしたが、征服者スペイン人に対する不信の念が消えない先住民は暗い堂内に入ることを拒んでいた。それは太陽を信仰していた先住民が暗がり嫌いを嫌ったためと思われるが、被征服初期、暗い堂内に閉じ込められて自由を奪われると危惧してのことだったとともとれる。

そうした先住民の反応を見た修道士たちは、教会本体の脇に「開放型礼拝堂」なるものを増設する意匠を思いついた。以前トラスカラの記事で紹介したが、祭壇付き野外音楽堂を想像して欲しい。修道会によって規模や形は様々だが、礼拝堂の壁にはキリスト教にまつわる絵が描かれている。開放型であるために時代とともに絵が薄れてきて歴史的価値が消えつつあるのは残念だ。内容はアダムとイブの話から、子供の頃にお寺で見た怖い地獄絵のようなものも描かれている。

さて、ハルパンの話に戻ろう。18 世紀中期のメキシコの修道院・教会建築には既に開放型礼拝堂の意匠は廃れていた。2 世紀の間に先住民がキリスト教を受け入れた結果だと思うが、それでも平定が遅れたゴルダ山脈ではキリスト教化にひと工夫を要すことになっ

た。その装置としてここに赴任した修道士たちは、教会内の主祭壇装飾を教会正面に持ち出すという意匠を生み出すことになった。前述のように、その建設作業を先住民の職業訓練の場にすることによって、教会の建物に愛着を持たせることにも繋がった。紙面の都合上、その装飾の細かな絵解きは拙書『国王の道』(未知谷)を参考にされたい。

### サン・ミゲル・コンカ

前述のハルパンから69号線で40キロほど北上すると、道路沿いの広大な耕作地の西にコンカ村がある。村への約500メートルの取り付け道路脇は何棟も続くビニールハウスが占領していて、その広大な土地で筆



柿の形をしたトマトを栽培していた。ここはまぎれもない農業地帯だ。そのコンカ村には人影

がなかった。お店もない。そういえば動物の鳴き声も聞こえない。村中そろってシエスタのようだ。

村はやはりフニペロ・セッラとその修道士たちが建設した修道院・教会サン・ミゲル・コンカの周辺にできた小さな集落だった。修道院・教会と集落があるのはサンタ・マリア川の河岸段丘の上で、トマトを栽培していたのも丘の上。そうしてもう一つの見所は湧水が形成するビオトープ公園とサッカー場脇に立つ見事な樹形の千年樹である。その千年樹の下でコンカのニンフが私

を待っていた。撮影をここ



千年樹

ろよく承諾してくれたそのニンフ、ポーズの取り方が並でない。聞けばグアナファト大学で演劇の勉強しているのだという。なるほど。



↑コンカのニンフ

いっぽう、丘を下った川沿いには水をたくさん必要



養魚池

とする作物サトウキビや粟、ひえなどの畑、花卉などの園芸栽培のほか、魚養殖のための池が連なっていて、2つの異なった

植生がコンカに豊穡を約束しているのだと知った。ここに着任した修道士たちにとっては宗教的理想郷建設に最良の環境だったに違いない。

1754年から58年にかけて建設されたこの教会の正



コンカの教会(修道院)

面装飾は、やはりキリスト教布教のための絵解きの装置となっている。この教会で最も注目すべきは、最上端の中心にある、サンテ

ィシマ・トリニダド：三位一体の彫像だ。父なる神と息子のキリスト、それに精霊が白い球体の上に片足をのせて休息のポーズをとっている。その白い球体とは水陸からなる我々が住む地球なのだが、彼らがこの地球を支配していることを示している。



三位一体の彫像

その正面装飾のそのトリニダドの像の下に、一体の

大きな像がある。この教会の守護聖人サン・ミゲル・



守護聖人サン・ミゲル・アルカンヘル

アルカンヘル像だ。彼は鎧甲を着け、剣を右手に持って、倒れたままの悪魔の上に足を乗せている。悪魔は無様な格好で今にも軒から突き落とされそうになっている。思わず吹き出しそうになる。その絵解きの話は紙面が許さないので割愛させていただくが、興味のある方は拙書『国王の道』(未知谷)を参考にされたい。

修道士たちと中央から連れてきた改宗メヒコ族の職人の手ほどきで、コンカの先住民の職業訓練による教会建設が成し遂げられた。だが、フニペロ・セッラ神父と一部の修道士は、ここでの改宗の実績を買われて、当時、苦境に立たされていたテハス(現米国テキサス州)のサンアントニオの布教村立て直しのために、メ



祭り装飾WSに参加する欧州観光客

キシコ市に戻されている。その後の彼らの動向については次回に話したい。

(連載その3完)

阿部修二会員に「ぶらりメキシコ人旅」と題して、メキシコのあちこちを訪ね歩いたエッセイを連載していただきます。

第1回(2022年1月号):トラスカーラ 第2回(同4月号):ケレタロ 第3回(同7月号):ハルバン&コンカ

阿部さんは2005年よりアミーゴ会会員。1947年岩手県花巻市生まれ。岩手大学工学部卒および桑沢デザイン研究所ビジュアル・デザイン科卒。日本写真家協会元会員。メキシコ教会美術に惹かれ1986年より毎年渡墨。2005年以降4冊のメキシコ関係書籍を発行。最新作は『先住民のメキシコ—征服された人々の歴史を訪ねて』(2021年9月刊 明石書店)です。<編集部>

## メキシコの著名文化人・スポーツ選手等の人名録

～その2～

メキシコ・日本アミーゴ会会員 桜井悌司  
一般社団法人ラテンアメリカ協会常務理事

## (3)メキシコの著名画家 10名

インターネットでメキシコの著名な画家として検索すると、下記の10名が出てきた。多数のメキシコの画家の中から下記の9名と日系の画家3名を選んだ。(誕生日順)。(以下同じ)

表：Famous Mexican Artists &amp; Paintersからのリスト

画家名

画家名

- |                           |                          |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. Frida Kahlo            | 6. Remedios Varo         |
| 2. Diego Rivera           | 7. Rufino Tamayo         |
| 3. Leonora Carrington     | 8. José Guadalupe Posada |
| 4. José Clemente Orozco   | 9. Gabriel Orozco        |
| 5. David Alfaro Siqueiros | 10. Dr. TTL              |

## \*ホセ・グアダルーペ・ポサーダ

## José Guadalupe Posada

1852年～1913年。メキシコの画家、イラストレーター。メキシコの死者の日と関連した骸骨の絵画で有名。代表作は「骸骨の自転車乗り」Skeltons riding bicycles (名古屋市美術館)、「着飾った夫人」Catrina、「ドン・キホーテ」Don Quijote 等。

## \*ホセ・クレメンテ・オロスコ

## José Clemente Orozco

1883年～1949年。メキシコの象徴主義の画家。メキシコ革命中に「技能労働者・画家・彫刻家連合」に参加するとともに、ディエゴ・リベラやシケイロスと共に壁画運動を推進した。メキシコ革命の光景も扱った悲劇的な絵画もある。代表作は、ハリスコ州庁舎の壁画「立ち上がる神父イダルゴ」Hidalgoや国立芸術宮殿の壁画「カタルシス」Catarsis等。マンガ的な絵画も多数。

## \*ディエゴ・リベラ Diego Rivera

1886年～1957年。メキシコの画家、キュービズムの影響を受けた。メキシコ壁画運動のリーダー的存在でメキシコ絵画の代表的アーティスト。メキシコの民族的伝統と社会主義的色彩の中で、メキシコの社会、歴史、庶民生活を描いた。代表作は、ソカロ広場にある大統領宮殿の「メキシコの歴史」Historia de Mexico。1931年には、ニューヨーク近代美術館で回顧展が開催された。フリーダ・カロの夫でもあった。メキシコには、「ディエゴ・リベラ壁画博物館」、

「ディエゴ・リベラ・アトリエ美術館」、「ディエゴ・リベラ博物館」の3つの博物館がある。

## \*ダビー・アルファロ・シケイロス

## David Alfaro Siqueiros

1896年～1974年。メキシコ社会主義リアリズムの画家。ディエゴ・リベラやホセ・クレメンテ・オロスコたちと共にメキシコ壁画運動を推進した。巨大なフレスコ画で有名。代表作には、メキシコ国立博物館の「ポルフィリオ時代から革命へ」、シケイロス文化ポリフォールの壁画、メキシコ国立自治大学 (UNAM) のキャンパスの壁画。マルクス主義者を公認し、1996年には、「レーニン平和賞」を受賞した。

## \*ルフィーノ・タマヨ

## Rufino del Carmen Arellanes Tamayo

1899年～1991年。オロスコ、リベラ、シケイロスの3巨匠に続くメキシコの代表的な画家。ニューヨークやパリでの活動で印象派やキュービズムの影響を受ける。メキシコの伝統とヨーロッパのフォービズムを混合した作風。代表作は、国立人類学博物館にある「Dualidad」、国立芸術宮殿にある「国民性の誕生」Nacimiento de nuestra nacionalidad等がある。メキシコ・シティには、「タマヨ近代美術館」、生誕地のオアハカには「ルフィーノ・タマヨ・メキシコ・プレヒスパニック造形美術館」がある。名古屋市美術館でも「夜の踊り子」等数点を保有している。内外から多数の美術賞や勲章を受章した。

## \*フリーダ・カロ

## Magdalena Carmen Frida Kahlo Calderón

1907年～1954年。世界中で認識されている数少ないラテンアメリカのアーティストの1人。今やラテンアメリカで最も影響力のある画家。父はハンガリー系のユダヤ人。彼女の現実を表現した数多くの自画像を制作した他、メキシコのアイデンティティーや遺産を表現した絵画、植民地主義、ジェンダーやフェミニズム、や人種問題を扱った絵画を制作した。1929年には画家のディエゴ・リベラと結婚。メキシコ・シティには「フリーダ・カロ美術館」がある。

## \*レメディオス・バロ

## Remedios Varo Uranga

1908年～1963年。スペインのジローナ生まれ、メキシコに亡命・移住。シュールレアリズムの画家。同じ境遇のキャリントンと親しかった。代表作は「菜食主義の吸血鬼たち」Vampiros vegetarianos等々。

## \*レオノーラ・キャリントン

## Leonora Carrington

1917年～2011年。英国生まれでメキシコ、フランスで活躍した画家。マックス・エルンストの影響を受け、シュールレアリズムの絵画の制作や先住民文化の影響を受けた彫刻の制作を行った。代表作は、国立人類学博物館にある「マヤ族の魔術的世界」El mundo magico de los mayas、サンルイス・ポトシーのレオノーラ・

キャリントン美術館にある「サギの小舟」La barca de las garzas等。小説家としても活躍した。

**\*ガブリエル・オロスコ**

**Gabriel Orozco**

1962年～。メキシコのアーティスト、彫刻家。国際的に活躍している現代アーティストの1人。どこにでもある物や何気ない風景の中から魅力を発見し、少し変換したりする作品。オロスコは2009年から2011年にかけて、ニューヨーク近代美術館を皮切りにテート・モダンほか世界の主要美術館で大規模な個展を開催した。日本でも2015年、東京都現代美術館で個展を開催した。日本の若手アーティストにも影響を与えている。

**\*メキシコで活躍した日本人画家\***

メキシコに魅せられ、メキシコの先住民、社会などの絵画を描いた日本人画家には、北川民次(1894年～1989年、Tamiji Kitagawa)、岡本太郎(1911年～1996年、Taro Okamoto)、利根山光人(1921年～1994年、

Kojin Toneyama)等がいる。

北川民次は22年間にわたりメキシコに滞在し、壁画運動に共感し、先住民の生活等につき油絵や版画を描いた。また児童美術教育の推進にも貢献した。日本でも二科会会長を務めた。著書も多数。

「芸術は爆発だ」で有名な岡本太郎も1960年代にメキシコを訪問し、シケイロスなどの壁画運動から大きな影響を受けた。メキシコ滞在中に描いた大壁画「明日の神話」(縦5.5メートル、横30メートル)は、長年行方不明となっていたが、2003年に発見され、日本に持ち帰り、平野暁臣氏のグループで修復後、渋谷駅に設置されている。

利根山光人は、メキシコを題材とした情熱的な作品を多数残した。メキシコのマヤ文明をテーマにした油絵やリトグラフで有名である。代表作は、横浜駅西口の中央道路にある「太陽とこどもたち」がある。宮城県北上市には「利根山光人記念美術館」がある。

**(4)メキシコの著名作曲家 5名**

インターネットで調べると、「5 Mexican composers you should know on Cinco de Mayo」というページがあり、Manuel Ponce、Carlos Chaves、Silvestre Revueltas、Antonio Marquesの4名と、ここでは触れないGabriela Ortiz(1964年～)が入っている。ここでは5名を紹介する。

**\*リカルド・カストロ**

**Ricardo Castro**

1864年～1907年。メキシコの作曲家、コンサート・ピアニスト。ポルフィリオ・ディアス時代のロマンチック音楽の最後の音楽家と言われている。7歳～8歳の時から作曲を始める。1979年、メキシコ国立音楽院で学ぶ。1903年から06年まで、パリ、ロンドン、ベルリン、ブラッセル、ローマ等に滞在した。帰国後、メキシコ音楽院院長に任命される。代表作は、オペラ作「Atzimba」、  
「ルーデルの伝説」La Leyenda de Rúdel、他多数のピアノ曲、交響曲等がある。

**\*マヌエル・ボンセ**

**Manuel María Ponce**

1882年～1948年。メキシコの作曲家、音楽教師、ピアニスト。メキシコ国立音楽院を卒業後、ボローニャとベルリンに留学。帰国後、メキシコ国立音楽院で教鞭を取る。その後、1925年に再度渡欧し、パリ音楽院で作曲を勉強、パリでアンドレス・セゴビアやヴィラ・ロボス等と親交を結ぶ。彼は、ギター曲、ピアノ曲、歌曲、室内楽曲、協奏曲、交響楽等広範囲な曲目を作曲した。代表作は、「Estrellita」、ギター協奏曲「南の協奏曲」Concierto del Sur、「ロマンチックなソナタ」Sonata Romántica、「南国のソナチネ」Sonatina Meridional等。

**\*シルベストレ・レブエルタス**

**Silvestre Revueltas**

1899年～1940年。メキシコのクラシック音楽の作曲家、指揮者、バイオリニスト。メキシコ国立音楽院、オースチンのセント・エドワード・カレッジ、シカゴ音楽大学に留学。1929年、カルロス・チャベスに招かれ、指揮者助手を務め、チャベスと共にメキシコ音楽の普及に努める。スペイン内戦で義勇軍側に参加。代表作は「Sensemaya」(キューバの作家ニコラス・ギジェンの

詩から取ったもの)、「ガルシア・ロルカへの賛歌」、映画音楽としては「Vámonos con Pancho Villa」、「マヤ族の夜」La Noche de los Mayas。その他管弦楽、交響曲等。

**\*カルロス・チャベス**

**Carlos Antonio de Padua Chávez y Ramirez**

1899年～1978年。メキシコの作曲家、指揮者、音楽教育家。ヴィラ・ロボスと並びラテンアメリカを代表する作曲家。メキシコの民族音楽、ネイティブ・アメリカンの音楽、スペイン風メキシコ音楽という3つの特徴を持つ音楽を作り上げた。5つのバレエ音楽、6つの交響曲、4つの協奏曲。1つのオペラ、多数のピアノ曲等を作曲した。代表作は「交響曲第1番アンティゴナ」Sinfonía de Antígona、「交響曲第2番インディオ」Simfonía India。指揮者としても米国、欧州、ラテンアメリカの著名オーケストラを指揮した。また1937年には『来るべき音楽』、その後『音楽と電気学』の2冊の著書を発表し、新音楽の考察に貢献した。1947年、メキシコ国立音楽院の院長に就任し、メキシコ国立交響楽団の創設、初代音楽監督としても活動した。

**\*アルトゥーロ・マルケス**

**Arturo Márquez Navarro**

1950年～。メキシコの現代音楽の作曲家。ネイティブ・メキシコのスタイルを彼の作曲に融合した。12歳の時にカリフォルニアに移住。その後メキシコ音楽院やカリフォルニア芸術大学で学ぶ。1994年に「Danzón No.2」を発表。オーケストラで演奏される現代音楽の人気楽曲となっており、グスタボ・ドゥダメル指揮のシモン・ボリバル・ユース・オーケストラのプログラムにも取り入れられている。代表作はベラクルス地方の音楽を取り入れた「Danzón No1-No9」。2009年に「メキシコ芸術科学賞」を受賞。



表「メキシコの曲目とその作曲家」

日本人のほとんどが知っているメキシコの歌曲の作曲家をリストアップした。

曲 目	作 曲 家	その他・コメント
La Paloma	Sebastián de Iradier y Salaverri (1807-1865)	スペイン人作曲家
La Sandunga	Máximo Ramón Ortiz (1816-1855)	テワンテペック地峡に伝わる歌
La Llorona	作曲家不明。	テワンテペック地峡に伝わる歌
Cielito Lindo	Quilino Mendoza y Cortés (1862-1957)	Andrés Henestrosaが1941年に作詞 誰もが知っているメキシコの代表的な歌
La Bamba	作曲家不明	Richie Valensが流行させた
Sobre las olas	Juventino Rosas (1868-1894)	ワルツ「波濤を越えて」
La Cucaracha	Francisco Rodríguez Marín (1862-1957)	スペイン人作曲家。メキシコ革命時に歌われた
La Adelita	Antonio del Río Armenta (1892-NA)	メキシコ革命の英雄的女性の歌
Bésame mucho	Consuelo Verazquez (1916-2005)	他に「カチート」も作曲
Solamente una vez	Agustín Lara (1897-1970)	有名な「グラナダ」も作曲
Historia de un amor	Carlos Eleta Almaran (1918-2013)	パナマ人作曲家。日本語題「ある恋の物語」
El rey	Jose Alfredo Jiménez (1926-1973)	メキシコのシンガーソングライター、ランチュラス
Cucurucucu Paloma	Tomas Mendes (1927-1995)	ベラクルスに伝わる民族舞踊局
La Golondrina	Narciso Serradell Sevilla (1843-1910)	「燕」誰もが知っているメキシコの民謡
La Estrellita	Manuel Ponce (1882-1994)	「小さな星」メキシコで良く歌われる歌曲
La Bikina	Rubén Fuentes (1926- )	マリアッチ
Cuando vuelva a tu lado	María Grever (1885-1951)	「あなたのそばに戻る時」 米国でダイナ・ワシントンが歌って大流行
Frenesí	Alberto Domínguez (1906-1975)	マリンバの曲からジャズのスタンダードに
Quién será	Pablo Beltrán Ruiz (1915-2008)	マンボ「キエンセラ」米国で大ヒット
La Malagueña	Pedro Galindo Galarza (1906-1989)	Malagueña salerosaとも
Adoro, esta tarde vi llover	Armando Manzanero (1935-2020)	「アドーロ」メキシコの世界的歌手・作曲家。 カラオケ定番

(連載その2完)

桜井悌司会員は昨年、ラテンアメリカ協会のホームページに「ラテン好きのためのリベラルアーツ」と題して中南米各国縦断で12回連載されました。このほど国別に再構成した「著名文化人・スポーツ選手等の人名録・メキシコ編」をまとめられ、アミーゴ会員にも提供して下さることになりました。今号から分割掲載します。お楽しみください。なお、「メキシコ編」は同協会 HP に一括アップ(<https://latin-america.jp/archives/52130>)されています。メキシコ編の内容は下記の通りです。

- (1)メキシコのノーベル賞受賞者：第50号掲載 (2)メキシコの著名作家・詩人：第50号掲載
- (3)メキシコの著名画家：第51号掲載 (4)メキシコの著名作曲家：第51号掲載 (5)メキシコの建築家
- (6)メキシコ出身のメジャー・リーガー (7)メキシコの著名サッカー選手 (8)メキシコの著名ボクサー
- (9)国際空港に見るメキシコ人 (10)紙幣にみるメキシコ人

桜井さんは現在、ラテンアメリカ協会常務理事、NPO 法人イスパニカ文化経済交流協会理事長、1967~2008年ジェトロ勤務(メキシコ、チリ、ブラジル、スペイン、イタリアに計15年半駐在。展示事業部長、監事)。2008~15年関西外国語大学教授。 <編集部>

\*\*\*\*\*

**メキシコ報告 6州知事選で政権与党が4州奪取**

2022年6月知事選で、政権与党連合(MORENA:国家再生運動・労働党・緑の環境党)候補が6州のうち4州で知事ポストを野党から奪取、南部諸州を中心に全32州のうち22州が与党系知事となった。2023年の2州知事選を踏まえて2024年大統領選では、現在の左派政権に続き反ビジネス政権が誕生する可能性が高いとされる。メキシコ経済は物価高と金利高の影響で低迷するもAMLO大統領の支持率は高い(6月8日 54.8%)。



(出所: El Financiero 紙 6月6日)

あとがき：今号から「釣りキチ純平さん」こと、柿沼純平さんにメキシコを中心とする釣り三昧の日々を綴って貰います。柿沼さんは現在、ワルシャワ支店長として超多忙の日々をお過ごしですが、一段落したら今を時めくホットスポットでの日常生活や活動の様子もご寄稿いただく予定です。ところで今年の干支は「壬寅：みずのえ・とら」で、新しい潮流の発生を暗示するとのこと。60年前の壬寅≡1962年にはキューバ・ミサイル危機が米ソ冷戦思考を変革し、60年後の今年にはロシアのウクライナ侵攻がポスト冷戦構造を一変しました。個人的にはコロナ禍の一举克復に向けた革新技術開発を期待も残念無念。私たちは次の世代のためにも、新しい時代における宇宙と地球の平和構築を真剣に模索すべき定めよう。頑張るべし。ご健勝に。[20220718か]